

曲り角

昭和46年11月第1号

シンポジウム

「体育心理学研究の課題」について

東京教育大学 松田 岩男

本年度の日本体育学会第22回大会における体育心理学専門分科会のシンポジウムでは、「体育心理学研究の課題」がとりあげられる。

昨年度にひきつづいて、「スポーツセラピー」の問題を、という声もあったが、原点にかえて、現在までに研究されてきたことがらを総括し、それらを、体育心理学の領域の中に位置づけたり、今後の研究の方向を探ったりすることが必要である、との考え方からこの問題が選ばれた。

体育心理学の領域で報告される研究は比較的多く、しかも、対象や方法も多岐にわたっているが、今回のシンポジウムでは、①スポーツとパーソナリティに実する研究、②知覚運動学習の研究、③集団に関する研究の3つの領域がとりあげられた。

スポーツとパーソナリティの問題は、人間形成をめざす体育の基本的な問題の1つであり、その研究の成果は、体育における学習指導の基礎として、あるいは、学習指導の方向を示すものとして、重要な役割を果たすべきであると考えられる。しかし、従来の研究には、競技者と非競技者の性格特性の比較あるいはスポーツマンの性格特性を、平均的に明らか

にする、というものが多く、とすれば、各種の性格検査を、運動選手に実施したという結果に終りがちである。

知覚運動学習については、世界の各国で、従来心理学の領域で研究されてきた結果をまとめて、それらを体育で扱う運動技術の学習に適用しようとする試みがなされている。わが国にも同様の傾向がみられるが、実験的な研究が多く、実際に体育の学習指導で扱うような運動技術をとりあげた研究は比較的少いようである。研究上の困難はあるが、体育心理学の立場からは、実際に扱う運動技術の学習の問題にとり組む段階にきているといってもよいであろう。実験室での精密な研究も必要であるが、同時に、体育館やグラウンドでの研究も重要である。

集団に関する研究も同様である。この領域は、従来主として、体育社会学の領域でとりあげられてきており、そこでの研究には、他の領域で、すでに明らかにされている事実を運動の場面で確認する、という傾向が強いように思われる。すなわち、研究のモデルが他に求められ、そのために、体育やスポーツの集団そのものを究明しようとする構えが不十

分であると思われるのである。

「体育心理学は曲り角にきている」と云われてから、すでに数年を経過してきている。これらの問題についての討議を通して、われわれは、今後の研究の方向を見出すとともに

改めて、「体育心理学とは何か」を考えてみたいものである。

舞 児 と 動 き の リ ズ ム

香川大学教育学部 岸 純子

2年ほど前、舞学校でダンスの創作を指導したことがある。人数が少いので、高校部全員と専攻科を合併した授業であった。舞者に関する知識は大して豊富な方ではなかったがあまり不安は感じなかった。というのは次のような予想をもっていたからである。即ち、

- ・病気または遺伝などによって、聴覚以外の器官が損われていないかぎり、体を動かす能力は、一般と大差ないであろうということ。
- ・音の旋律的な要素は捉え難いかもしれないが、リズム的な要素は、他の器官の補佐的な働きによって比較的容易に捉えられるのではなからうかということ。
- ・一般のダンス未経験者がよく抱くような身体表現に対する 恥は（手まねによる会話などで馴れているので）あまりもたないのではなからうかということ。

等々である。

大体においてこの予想は裏切られることなく、5時間という短い期間であったが、「喰らいつくような」熱中、思いもかけなかったすばやい反応で、3つほどの習作を次々と作り出し、「やりさえすれば一般と少しも変わらない。やれないと思いきまれている所に問題があるのだ」と大いに気をよくしたものであった。

しかし、一般と少しも変わらないと考えるのはやはりまちがいである。確かに「動くこと、動くことで自分のあるものを表現すること」による快感や満足感は一般と同じであろうが、ダンスのもう一つの面、「音楽をきき

、音のリズムやメロディーによって体を動かす」快感は得られたとはいえない。外観的には、動きにあわせて音楽を流す、とか、音楽のリズムを視覚的な合同（小旗をふるなど）で掴ませるなどして、いかにも一般と同じような状態をつくり出すことはできるが、動いている本人達は、傍に音楽が流れていることにはあまり痛痒を感じないのである。（もっとも全舞というのは少く、かなり強度の難聴、ある範囲のサイクルの音のみが聴えるものなどが殆んどで、全くの無音の世界に住んでいるわけではないが）もし「音楽にのる」という快感に似たようなものを味わせようとするれば、「打楽器によるリズムにのる」ことならできるかもしれない。しかもそれは、できるだけ、動く者の体近くで音が出されるのがのぞましい。

このダンスの期間、このようなことを考えていたが、具体的に試みることはしなかった。これが実現したのは今年の7月である。

今度は小学部の4年～6年生を対象とし、竹製の拍子木を自分で打ち鳴らしながら体を動かす方法であった。色々なつごうで2時間しか行なえなかったが、この間に、前にはそれほど感じなかった事に気付いた。それは発声の役割である。生徒たちはふつう無言で動いている。しかし舞学校ではあらゆる機会に声を出す訓練をしているので、試みに動きながらイチニイサンシイと自分達で号令をかけさせてみた。面白ことにこのようにすると、私の方から視覚的な信号を送るより正確に動きのリズムを捉えるのである。これはあたり

まえのことかもしれない。たとえ自分の声
きこえなくとも動きより小さいエネルギーで、
からだの一部が動くことは、動きの長さとその
配分を捉えるのに手がかりになるのかもしれない。
リズムは時間的なものである。しかしそれは視覚的なものでも、聴覚的なものでも捉えられるものであり、直接に人間に働きかけるものであって、どちらかがどちらかの仲介的役割を務めるものとは考えていなかった。今もなおその考えでいるが、今述べたように各人が各人にかかる号令が果たした役割を考えると、リズムというものは捉えるにしても、発するにしても、人間の内部であるおきかえがなされるのだろうかとも感じられる。前にそれが感じられなかったのは生活年齢が

高かった為に色々な反応に馴れ、おきかえの必要が少なくなったのだろうか？

一般に聴者は行動が緩慢であるとか、身長や体重、胸囲もやや劣っているといわれている。音の世界が狭められているというだけの（他器官が損われている者は別として）差が一見関係ないように思われる面へも影響をあたえるのだろうか？ それは、早くから聴者となった者と、ある年齢に達してから患った者と差があるのだろうか？

10月から再び、「打楽器と発声をおり込んだリズム運動」を続けることになっているが、今はただ雑感として頭の中にあるこのようなことも、実際の活動を通して掘り下げられるものなら……と願っている。

「曲り角」雑感

富山大学 中川 孝

体育心理学に関心をよせて日も浅く、分科会に所属して1年足らずの私に、投稿を依頼されたときは些か困惑したが、会報の名称が「曲り角」であることに興味をおぼえた。どのようなことで名付けられたかは知らないが、私なりの解釈で体育心理学あるいは心理学一般が曲り角にきているといった意味にとらせてもらった。このことに関しては日頃考えているところでもあり、曲り角に共感し、或程度気持が落着いた。しかし所詮浅薄者、盲者蛇に怖れずの類、噓として読み流していたゞきたい。

これまで目にふれた心理学書によれば、心理学の定義はその人、その学派の科学観、人間観などによってさまざまである。おそらく体育心理学においても同様であろう。心理学の歴史において、科学としての心理学は、自然科学の著しい発展の時代的影響をうけ、自然科学的科学的科学観が支配的であり、操作主義的、機能主義的心理学となったが、今日においても伝統的心理学として根強く存在していることは否定できない。そこで対象となる人間

は基本的には操作可能な存在としかみえていないようである。ここで、今日の人間の科学としての体育心理学は、この点に関してどのような趨勢にあるのか、そして私自身どのように把握していくべきかを自問し続けているのが私の現状である。そしてこのことが人間理解の最も大きな曲り角に思えてならない。今日の文明社会は、高度に技術化されマスプロ化された「管理社会」であるといわれるが、もし、体育心理学がその社会に順応するための人間をつくることに助力するための学問として墮落するならば、ハイゼンベルグが“原子物理学に關与する科学者の科学を哲学することの欠除が人類に恐怖をもたらした”とする方向と同じ結果を招くように思えてならない。そしてまた、体育心理学が人間行動の説明的体系を求める論理性と、普遍性、客観性を金科玉条として人間にアプローチするならば、Humanistic PsychologyやPhenomenological Psychologyの人々が指摘するような人間不在の心理学となるであろう。研究者本位のそして研究者の

ための研究ではなく、人間存在の次元にもどり、現象そのもの、行動の意味そのものにはちかえるべきであろう。このことに対しては、行動主義的心理学の立場から、形而上学としての現象学や実存在義哲学の影響であり、いわゆる科学としての方法論が確立されていないが故に、過去の内省心理学にもどると反論されることは明らかである。こゝでの科学における客観性は、主観性との対立概念として設定され、二者択一的思考によって客観性は絶対的意味をもち、主観性は非科学的として排斥されている。これに対しては、メルロ・ポンテの指摘するように、真の人間の科学は、斯様な二者択一的思考を超越したところにあり、例えば経険、意識、異常行動においてこのことは明らかである。要するに、過去の心理学に逆行することではなく、戸川氏が臨床心理学の確立で主張されているように、真

の意味の新しい方法論を確立し、応用科学としてではなく、独立した学問領域を形成し創造的に発展させることが体育心理学においても必要であると考え。しかし、最近ある領域にあっては次第にこれが実現の方向にあり、しかもそのProcessingが始まっていると感ずるとき、もはや「曲り角」ではなくなっていると思うし、私自身その方向で努力していきたい。

最後に思うことは、私の人間に関するFrame of Referenceに絶えざる変化をもたらし、そして教示してくれる人々は、臨床領域にあたっては、PatientあるいはClientとよばれる人々であり、教育にあたっては学生、生徒諸君である。私のあり方開り方を体験的に顕示してくれるある意味で私の師たるそれらの人々に感謝しなければならぬ。

お知らせ

1. 総会

本年度総会を学会期間中に、下記のように開催いたしますので、多数御出席下さい。

期日 昭和46年11月21日(学会第1日)

時間 正12時30分より

場所 日体大721教室(体育心理発表会場)

議題 会計報告

活動状況報告

その他

2. 例会

第1回 今年度第1回例会は6月25日、東教大において原理分科会と合同で行なわれました。演題は下起のとおりでした。

TSP Iの改訂——テスト 度化の新しい試み——

東大 平田久雄

東教大 市村操

情報化社会と余暇

日体大 干原英之進

講演のあと、今年度の学会シンポジウムについての討議がなされ、さらに小委員会を開いて検討した結果、抄録に記載されたように決定しました。

第2回 9月25日、日本女子体育大学において開催、下記の両氏の発表がありました。

ウォームアップに対する態度

日本女子体育短大 滝幸三郎

運動学習に関する実験的研究

東大 岡野崇彦

体育心理学研究会会報

「曲り角」

昭和43年11月15日発行

代表 松田岩男
近藤充夫
市村操
杉原隆

連絡先 東京都渋谷区西原1丁目40番地
東京教育大学体育学部 体育心理学研究室
体育心理学研究会

電話 (460) 0511 (代) (内) 36